

江戸絵図にみる都市イメージ表現に関する基礎的研究

日本大学大学院理工学研究科社会交通工学専攻 学生会員 ○石川 柚希

日本大学理工学部まちづくり工学科 正会員 天野 光一

日本大学理工学部まちづくり工学科 正会員 阿部 貴弘

1. はじめに

まちの将来像を描く場合、従来の手法では、地図上にポイントとなるものをプロットしたり、写真を貼ったりする手法が多い。しかし地域のイメージを共有する時、このような手法は一目ではわかりにくい場合がある。そのため、皆が地域のイメージを共有できるような手法があるか、また、どうすれば都市のイメージを共有できるのかが模索されている¹⁾。

一方、江戸時代には地図の他に絵図が利用されていた。絵図は、作成主体がその目的によってあるがままの景観から取捨選択した図像、あるいはある価値体系によってイメージ化された図像である。そのため、地域のイメージの共有に資するものであった。絵図の構成を明らかにすることは、地域のイメージを共有しやすくする表現方法の構築に繋がると考える。

このような背景から、本研究では、絵図の描画対象や構図に着目し、絵図を描く際の都市イメージ表現の手法を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象

本研究では、広範囲を描き、かつ描画対象を大きく描くことができる屏風絵図に着目し、それらの屏風絵図のうち、江戸初期に描かれた「江戸図屏風」(図-1)及び「江戸名所図屏風」を対象として分析を行った。



図-1 江戸図屏風 左隻

3. 研究方法

本研究では、以下の分析を行う。

(1) 描画対象の分析

描画対象の分析にあたっては、「江戸図屏風」に貼ら

れている押紙を貼り所として、両屏風の描画対象を抽出し、それらの属性に着目した分析を行う。

(2) 金煙によるまとまりの分析

江戸初期の屏風には、ある領域もしくは描画対象を金煙によってひとまとまりに括るという描画手法があった。この金煙によるまとまりの分析にあたっては、個々のまとまりの中に描かれている描画対象の特徴を明らかにするとともに、各まとまりの描画位置やまとまりとまとまりとの隣接関係についても分析する。

(3) 都市イメージ表現の分析

都市イメージ表現の分析にあたっては、都市のイメージを構成する要素として、パス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマークに着目し、両屏風においてそれらの各要素に位置付けることのできる描画対象を抽出し、要素と対象との関係を明らかにする。

4. 研究結果及び考察

(1) 江戸図屏風

表-1 江戸図屏風の描画対象

描画対象		件数(件)
将軍家	家光の実績	2
	家光の行動	10
	江戸城	7
	重臣関係	40
社寺	将軍家に関わりの深い社寺	21
	庶民寄りの社寺	2
	不明	1
町人地	宿場	2
	商店	1
	物資の集積場	3
インフラ		11

表-1は江戸図屏風の描画対象である。100か所の描画対象中、59か所が将軍家に関する描画対象であった。描画面積としても将軍家に関わるものが多くを占めていた。

描画位置やまとまりの隣接関係を見ると、まず、将軍家に関わる描画対象は、江戸城を中心として、主に屏風の上側、右側、左側に描かれ、一方、町人地に関わる描画対象は、屏風の下側に描かれていた。これは、実際の位置と類似する位置関係である。また、社寺も実際の位置と類似した場所に描かれていた。このことから金煙のまとまり同士の隣接関係は、実際の隣接関係を保つことを意識して描かれたと考える。

キーワード 絵図、都市イメージ表現、江戸図屏風、江戸名所図屏風、江戸一目図屏風

連絡先 〒 274-8501 千葉県船橋市習志野台 7-24-1 日本大学理工学部交通システム工学科 TEL 047-469-5507

描画内容としては、まず、江戸城が最も大きく描かれていた。このことから、江戸図屏風では、江戸城が別格の扱いであったと考える。また、家光の実績、行動、重臣関係といった、將軍家に関わるものも多く描かれていた。一方、物資の集積場、宿場では、物資の運搬の様子や、そこで働く人々の様子といった、物流地区としてのまとまりが描かれていた。さらに、商店、庶民寄りの社寺では、賑わう人々の様子など、賑わいのある地区としてのまとまりが描かれていた。

都市イメージ表現としては、まず、街道、河川、堀割運河等のインフラが、金煙でくくられた一つのまとまり内で完結するのではなく、まとまりとまとまりを繋ぐように描かれていた。これは、こうしたインフラが、地区と地区を結ぶパスの役割を担っていたためであると考え。一方、橋梁や社寺は、「～のあたり」という界限を象徴する目印、すなわちランドマークとしての役割を担っていた。エッジについては、物理的なエッジとして隅田川が描かれていたが、その他においては物理的なエッジは明確には描かれていなかった。そのため、金煙がエッジの役割を担っていた。

(2) 江戸名所図屏風

表－2 江戸名所図屏風の描画対象

描画対象		件数 (件)
將軍家		3
社寺	將軍家に関わりの深い社寺	7
	庶民寄りの社寺	1
町人地		3
インフラ		7

表－2は、江戸名所図屏風の描画対象である。庶民の賑わいを描いた江戸名所図屏風だが、21箇所の描画対象中、町人地は3箇所と少なかった。一方、名所と呼ばれる社寺や日本橋通りといった主要インフラが、庶民の賑わいの場として描かれていた。

描画面積は、庶民に関わるものが大半を占めていた。

描画位置やまとまりの隣接関係を見ると、まず、將軍家に関連する描画対象は主に屏風の上側、町人地は下側に描かれる傾向にあった。町人地では、浄瑠璃、歌舞伎、女風呂などが隣接して描かれており、娯楽施設以外は省略されていた。しかし、各屏風対象の配置位置は、実際の位置と類似した場所に描かれていた。このことから、江戸図屏風と同様に、金煙のまとまり同士の隣接関係は、実際の隣接関係を保つことを意識して描かれたと考える。

描画内容は、喧嘩や歌舞伎、浄瑠璃といった娯楽、浅草で行われる三社祭といった庶民のアクティビティが主に描かれていた。それとは対照的に、將軍家に関わりがあるものは、人気がなく、全体的に小さく描かれていた。

都市イメージ表現としては、街道、及び河川は、金煙でくくられた一つのまとまり内で完結するのではなく、まとまりとまとまりを繋ぐように描かれていた。これは、こうしたインフラが、地区と地区を結ぶパスの役割を担っていたためであると考え。一方、「～のあたり」という界限を象徴するランドマークとしては、社寺が描かれていた。橋梁もランドマークとしての役割を担っていたが、社寺と比べると補助的なものであった。エッジについては、物理的なエッジとして隅田川と三十間堀が描かれていたが、その他においては物理的なエッジは明確には描かれていなかった。そのため、描画対象同士の距離が近い場合は樹木、遠い場合は金煙がエッジの役割を担っていた。

5. まとめ

江戸図屏風については、將軍家のものが多く描かれ、また、類似した要素がまとめて描かれていた。また、町人地では各地区で展開される物流や賑わいの活動の様子が描かれていた。江戸図屏風は、全体的に、地区や建造物といった特定の場所を明示したうえで、そこに展開される活動等の様子を描く傾向にあり、いわば空間型のイメージ図としてとらえることができる。

一方、江戸名所図屏風については、町人地で展開される歓楽的な庶民の活動の様子が多く描かれており、活動ごとにまとまりを持って描かれる傾向にあった。このことから、江戸名所図屏風は、いわば活動型のイメージ図としてとらえることができる。

都市イメージ表現では、街道、河川、堀割運河は、まとまりとまとまりを繋ぐパスの役割を担っていた。一方、橋梁や社寺は、強調的、補助的といった違いはあるものの、「～のあたり」という界限を象徴するランドマークとしての役割を担っていた。エッジについては、物理的なエッジとして隅田川や三十間堀が描かれていたが、大半が物理的なエッジは描かれず、金煙や樹木がエッジの役割を担っていた。

参考文献

- 1) 小野寺淳：絵図に描かれた自然環境－出羽国絵図の植生表現を例に、歴史地理学 172 , p.21, 1995